

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 林 姿穂

論 文 題 目

Lost and Emerging Manhoods in Melville's Later Novels
(メルヴィルの後期小説で描かれる男らしさの行方)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	滝川 睦
委員	名古屋大学教授	大室 剛志
委員	名古屋大学准教授	吉武 純夫
委員	立教大学教授	舌津 智之

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、19世紀アメリカの作家ハーマン・メルヴィルの後期小説において表象される「男らしさ」(“manhood”)の諸相を、その揺らぎ、消滅と発現に焦点を絞って論じることを目的としている。ただし本論で論じられる“manhood”はジェンダー批評で論じられてきた「男らしさ」だけではなく、19世紀アメリカの商業主義によって裏打ちされた経済的自立性、家父長的権力、父性、子供の対極に位置する成熟した大人、エディプス・コンプレックスを經由して生成される男性性などをも意味する。本論の特徴はそれらの「男らしさ」が消滅し生成されるダイナミクスに焦点を合わせたことである。188頁に及ぶ本論文は英語で書かれており、全体は3章から成る。

第1章では『ピエール、またはその曖昧性』と「私とわたしの煙突」の二作品が分析の俎上に載せられる。前者においては、ピエールの自己破滅の動因が、父親の肖像画が自己成型を促す鏡像と成りえていないこと、そして女性上位的世界を構築する母親や姉の脅威に他ならないことが指摘される。「私とわたしの煙突」においては、成人男性であるにも拘わらず、妻や娘によってエディプス・コンプレックス的去勢不安を掻き立てられる「私」が描かれる。「私」は家父長的権威を盾に、読者を巻き込むユーモアを武器にして、新たな「男らしさ」を確立しようとする事が明らかにされる。

第2章では「独身者たちの楽園と乙女たちの地獄」と「ヴェランダ」の二作品が論じられる。前者においては製紙工場における過酷な労働によって疲弊した乙女たちが描かれるが、彼女たちの「沈黙」は、工場監督者の家父長的権威や、ロンドンで遊興にふける独身貴族たる法律家たちの「男らしさ」を対比・前景化するだけでなく、脱構築していくモメントをはらんでいることが実証的に論じられる。「ヴェランダ」をめぐる論考においては、18、19世紀英国において流行した崇高美を理想とする画家の男性性が、崇高美の源泉を求める旅において遭遇した女性の労働する姿と彼女の「ヴェランダ」を見つめ返すまなざしによって、解体の危機に瀕することが指摘される。

第3章では『ベニト・セレノ』と『水夫ビリー・バッド』の二作品が分析される。どちらの作品も船上が舞台となっており、下の階級である船員が、上司の権威を解体していく様態が描かれていることが指摘される。前者では船員と、船首に掲げられた船首像が「沈黙」によって上司ベニト・セレノを死に追いやる過程に着目して論じられる。後者の作品においてはビリー・バッドが船員間に醸成する「男同士の絆」(ホモソーシャリティ)こそ、ヴィア船長の「男らしさ」を解体していくことが指摘される。吃音をその特徴とするビリー・バッドが死刑に処せられるさいに発する雄弁な言葉が、ホモソーシャリティを醸成すると同時に、船長の権威を剥奪していくからである。

結論ではメルヴィルの後期作品において表象される「男らしさ」はただ喪失されるのではなく、「私とわたしの煙突」や『水夫ビリー・バッド』において描かれたような形で新たな「男らしさ」の萌芽をも胚胎させていることが述べられる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

ハーマン・メルヴィルの後期小説における男性たちが抱える不安や焦燥を「男らしさ」の視座から照射し分析することが本論の眼目である。これらの男性が不安や焦燥に駆り立てられるのは、彼らの性格などに基づくのではなく、振動する多層的な「男らしさ」に由来することを検証し、それらの「男らしさ」の喪失と発現のメカニズムを解明することが本論の特徴である。本論文の学術的価値は以下の点に認められる。

第一に、本論文が文学研究の基本であるテキストの精読を真摯に試みていることである。昨今、批評理論の型に作品を当て嵌めるだけの予定調和的な研究がしばしば目につくが、作品の細部と向き合い粘り強く「男らしさ」の重層的な意味を解明しようとする本論文の姿勢は、本来あるべき文学研究の方法論に忠実であると評価されてよい。しかしこのことは論者が現代批評の潮流に無関心であることを意味しない。本論文は、ジェンダー批評の知見を踏まえつつ、精神分析などの諸理論をも参照する意欲的な試みであり、メルヴィルの難解なテキストに宿る人間心理の深層へと果敢に分け入ろうとする熱意を強く感じさせる。

第二に、分析の視座に据えられた「男らしさ」の概念をジェンダー批評で論じられてきたそれに限定することなく、歴史に裏打ちされた経済的自立性、家父長制的権威、父性、エディプス・コンプレックスを経由して形成される男性性など、「男らしさ」に幅広い意味の振幅を認めたことである。この点が本論を単なるジェンダー批評の枠に閉じ込めることなく、分析の射程を拡大させるのに有効に働いている。また「男らしさ」の重層性に着目することによって、従来論じられることの少なかった周辺的人物たちの「男らしさ」喪失の原因解明が可能になっていることは確実である。

第三に、本論文に通底する「沈黙」のモチーフへの目配りが、今後の生産的な発展性を秘めている点である。メルヴィルの諸作品に繰り返しあらわれる言語的空白を前景化する作業は、アメリカ本国における先行研究の盲点をつくものであると言える。なぜなら、自己主張・自己信頼を前提に、対話と討論による相互理解への到達を理想とするアメリカの文化的風土にあっては、沈黙の持つ意味や効果は過小評価されてしまうからである。『バートルビーの沈黙』を著したダン・マッコールを除き、そうした沈黙の意味を積極的に評価しようとするアメリカの批評家は少ない。その点、沈黙を一種の文化的伝統とする日本人の視座に立脚するならば、アメリカでは看過されてきた批評の新たな地平が見えてくる可能性が十分にある。

従来ジェンダー批評で論じられてきた「男らしさ」の系譜や、メルヴィルの代表作である『白鯨』への言及が少ないこと、「アリストクラシー」などの言葉遣いの曖昧さなどが、本論文の問題点として指摘されうる。しかしこれらの問題点は本論文の学術的価値を損なうものではない。以上により審査委員一同、本論文が課程博士（文学）の学位を与えるにふさわしいものであると判断した。

論文審査の結果の要旨